

神は愛なり光なり  
《 神秘と救いの世界 — 霊界物語 》  
霊界物語 霊主体従  
子の巻（第一巻）

～ 第6章

## 第一篇 幽界の探検

### 第1章 《霊山修行》

#### 現代語訳

11P 高熊山は上古は高御座山といい、のちに高座といい、高倉と書き、つづいて音がなまって高熊山となったのである。丹波穴太（京都府亀岡市）の山奥にある高台で、上古（大化の改新以前）には①開化天皇を祭った延喜式内小幡神社の在った所である。武烈天皇が世継ぎを定めようとなされたときに、穴太の皇子はこの山中に隠れておられて、高倉山に一生を送られたという古老の伝説が遺っている霊山である。天皇はどうしても皇子の行えがわからないので、やむおえず皇族の子孫を探しだして、継体天皇に御位を譲られたとゆうことである。またこの高熊山には古くから一つの謎が遺っている。

『朝日照る、夕日輝く、高倉の、②三ツ葉躑躅の其の下に、黄金の鶏 小判千両埋けおいた』

昔から時々名も判らない鳥が鳴いて、里人に告げたということである。私は登山するたびに、三ツ葉躑躅の株はないかと探してみたが、いつも見当らなかつた。大正九年の春、12 再度登山して休息していると、私の脚下に、その三ツ葉躑躅が生えているのを発見し、はじめてその歌の謎が解けたのである。

『朝日照る』といふ意義は、天津日の神の御威勢は朝日が昇るような勢をもって、天下に輝きわたり、夕日が輝くという、他の国々までも神徳がゆきわたり黄金時代の来ることであって、この霊山に神の威力と人の知恵では量り知れない徳を秘めおかれたといふ神界の謎である。

『三ツ葉躑躅』とは、三つの御霊、瑞霊の意である。ツツジの言霊は、いつまでも変わらないの意味である。『小判千両埋けおいた』大判は上を意味し、小判は下を表わし、確かで不動の権力を判とゆうのである。すなわち小判は小幡ともなり、神教顕現地ともなる。穴太の③産土神社に鎮まっておられる、御祭神が開化天皇であったのも深い神の策のお有りになったことと強く察しられる。これを思えばアヽ明治三十一年如月（二月）の九日、④富士浅間神社の祭神、⑤木花咲耶姫命の天使、松岡芙蓉仙人に導かれて、当山に私が一週間の修業を命じられたのも、決して偶然ではないとおもう。

神示のままに高熊山に修行した私の霊力発達の程度は、非常に迅速であった。13 汽車よりも飛行機よりも電光石火よりも、すみやかに霊的研究は進歩したように思った。たとへば幼稚園の生徒が大学を卒業して博士の地位に瞬間に進んだやうな進歩であった。⑥過去、現在、未来は透き通るように明らかではっきりしているし、神界の秘密をうかがい知るとともに、現界の出来事などは数百年数千年の後まで知り尽くすことができるのである。しかしながら、すべての事は神秘に属し、今日これを詳細に発表することのできないのは残念である。

聖師の生誕地亀岡市は京都駅から快速で20分ほどの京都市のベッドタウンです。明智光秀の居城亀山城があったところで、聖師の修行された高熊山は現在地図上では丁塚山354mと記されています。この地方を昔は丹波国斑鳩郡と言い聖師のお生まれになった所を曾我部(町)穴太といひます。生家は現在の大本瑞泉苑です。

『三ツ葉躑躅』とは、三つの御霊、瑞霊の意である・・・とあり三ツ葉躑躅＝瑞霊は聖師であり、小判は神教顕現地(こばん)であり神の教えが現れる地です。大本にとって亀岡は教(宣教と修行)の地場であり、綾部は祭祀の地場であります。

聖師は昔からこの時(末法の世)のために用意しておかれた人(身魂)です。しかし、如何なる聖賢も現世に生まれればこの世の法則に順う必要があります。従ってこれまでの現世の苦行も高熊山での霊界の修行も必要欠くべからざるものでした。

高熊山の修行で聖師は霊的能力は急速に発達し、またそれに応じて自分が救世主である事を自覚されるのです。

## 用語の解説

### ① 『開化天皇』

記紀神話で第九代天皇。生没年不詳。孝元天皇の第二皇子。名は稚日本根子彦大日日尊（ワカヤマトネコヒコオオヒヒノミコト）と云う。木庭次守・編『新月のかけ』に「開化天皇の御神業」と題して、次のような王仁三郎の言葉が記されている。「穴太の産土様は稚日本根子彦大日日命である。若き日本の根本の神様ということだから開化天皇はおくり名である。世界を統一される神様である。王仁は今は開化天皇の御神業をやっているのである。それだから開化天皇の宣伝歌「若人の奮ふるひたつべき時は来ぬ若き日本の春は近めり」（昭和青年会々歌となる）を日本中歌って廻らしたのである。日本は古いけれども若い国である（昭和六年十二月発表）。また、開化天皇は朝鮮、満洲、支那、蒙古、マレーまで行幸になったのである。王仁は今は開化天皇の仕事をやっているのである。（昭和十七年十月十二日夜 大本農園有悲閣にて）」とあります。（八幡書店『新月のかけ』上巻p333）》

神代の世界は日本を挟んで天教山より東は天照大神が、西は素盞鳴尊が治めていたと書かれています。その型として天教山より東は天照大神が、西を素盞鳴尊が治めて居られました。素盞鳴尊が高天原を追放になるに先立ち世界の統治を天照大神に委任されます。そこで、天照大神は素盞鳴尊とのお約束を果たすため、天孫降臨によって世界を統治なさる目的で瓊瓊杵尊ににぎのきこを下されたのです。従って開化天皇は世界の統一を図って蒙古やマレー（マレー半島）まで行幸なさり、聖師もまた世界統治の型として蒙古に行かれたのでしょう。

素盞鳴尊時代、有力な神々は各地に群雄割拠していたが天孫降臨までは国という区画がなかったと書かれています。

② 三つ葉躑躅みつばぢぢく 《ツツジ科の落葉低木。日本中部の山地に生じ、葉は広い菱形で三枚輪生。春、若葉に先立ち紅紫色の美花を開く。観賞用に栽培》

『三つ葉躑躅』とは三つの御霊、瑞霊の意である。とは出口王仁三郎聖師を指す。即ち聖師の御魂を隠し置かれたと言うことであり、亀岡は神政顕現地である。

物語三巻で三つ葉彦命（聖師）は「天の三ツ星（オリオン星座）の精魂の幸さちはひによりて地上に降り」、霊鷲山（高熊山）の麓、玉の井の邑むら（穴太）に生まれます。三つ葉彦命は三大教の教主であり、後に太玉の命、広道別として活躍します。



### ③ 産土うぶすな：

【ウイキペディアより】産土神（うぶすながみ、うぶしなのかみ、）は生まれた土地を領有、守護する神。あるいは本貫（先祖の発祥地）に祀られている神。単に産土ともいう。日本人の郷土意識と強く結びついた信仰。古神道では、産土神は、その者を産まれる前から死んだ後まで守ってくれる神とされており、個人に固有のものである。氏神、氏子の関係が血縁集団を基にして成立しているのに対し、産土神は地縁集団としての信仰意識に基づく。

玉鏡の714「他神の守護」に「産土の神が守るといふのは、村長が村民の世話をするやうなもので、決して人間に直接産土の神が来つて守るといふことはない」とある。しかし、年の初めに挨拶に行ったり、子供が生まれ、人が死んだら村長（産土神）さんにも報告することも必要である。

④ 富士浅間神社せんげん： 静岡県富士宮市にある元官幣大社。富士山の神霊木花咲耶姫命を祭神とし、ニニギノミコト、オオヤマズミノカミを配祀。みろく信仰と関わりがあるといわれる。

### ⑤ 木花咲耶姫命

木花咲耶姫命は富士山の祭神であるが物語では木花姫の分霊となっている。

木花姫は観世音菩薩に象徴されるように、三十三相に（人から虫けらにまで）身を変じ衆生を済度されます。物

第三回（霊界物語—第1章～第6章）

語の中では様々に姿を変え宣伝使の養成に活躍されます。本来の姿はミロクの大神の御顕現です。

現代語訳

14 霊界の業<sup>ぎやう</sup> といえば世間一般に奥深い山や谷に入って、世間から離れて種々の苦難に堪えてする修行だと考えている人が多いようだが、跣足<sup>はだし</sup>や裸になって、奥山の神社に立て籠り断食をし、湯<sup>ゆ</sup>を飲まず火を使った食事をやめ、神仏に祈願を凝らし、妙な動作や奇妙な行<sup>ぎやう</sup>を敢てすることで、徹底的に修行が完了したやうに思い誇る人々が多い。

すべて①業<sup>ぎやう</sup>（仕事。生業<sup>きやう</sup>）は行<sup>ぎやう</sup>（おこない。修行）である以上は、②顕幽一致<sup>けんゆういっち</sup>、身魂一本<sup>しんこんいっぽん</sup>の真理より、現実世界において出来るだけ③可急的<sup>かきゅうてき</sup>大活動をし、そのうえで全宇宙を治められる神の経綸<sup>けいりん</sup>（計画）に奉仕するのが第一の行である。たとえ一ヶ月でも人界の仕事をやめて山林に隠れて怪しい行いや、人の行くべきで無い業<sup>ぎやう</sup>に熱中するのは、まさに一ヶ月間の社会の損害であって、いわゆる神界の怠け者もしくは罷業者（ストライキ）である。すべて神界の業<sup>ぎやう</sup>というは現界において④生成化育<sup>せいせいしかいよく</sup>、進取発展の事業につくす事を第一の要件としなければならない。

大本の一部の人のように、何事も『⑤惟<sup>かむながら</sup>神かむながら』といて難しいことを避け、易しいことに就こうとするのは神界より御覧になれば、15 実に不都合できわめて行き届かない人間といはれてもしかたはない。少しも責任観念というものが無いのみか、尽すべき道をつくさず、かえって神業の妨害ばかりしながら、いつも神界にたいして、不足ばかりいっている。これがいわゆる黄泉醜人<sup>よみづしこびと</sup>《死後の世界の醜悪な人》である。神諭に、『世界の落武者《戦いに負けて逃げ落ちる武士》が出て来るから用心なされよ』

ということが示されている事を考へてみればよい。神界の勤めというものは、そんな軽々しい容易なものではない。それなのに自分から山林に分入って修行することを非難しておきながら、かんじんの御本人は一週間も高熊山で修業をしたのは、矛盾もはなはだしいではないか……との反問も出るでしょうが、しかし私はそれまでに二十七年間の俗界での悲痛な修行を成し遂げてきた。その卒業式ともいべきものであって、生存中ただ一回のみ後にも先にも無いような実修であったのである。

世間では……釈迦でさへ⑥檀特山において数ヶ年間の難行苦行をやって、仏教を開いたではないか、それに僅か一週間ぐらいの努めで、⑦三世を見通すことが出来るやうになったとは、16 あまりのおおげさな言いようではないか……と、疑問を抱く人々もあるでしょうが、釈迦<sup>いんど</sup>は印度国の浄飯王<sup>じやうほん</sup>の太子として生れて、社会の荒い風波に遇うたことのない坊っちゃんであったから、数年間の種々の苦難を味わったのである。私はこれに反し幼少より極貧の家庭に生れて、社会のあらゆる苦勞を尽くしてきたため、高熊山に登るまでに現実界の修行をおえ、また幾分かは幽界の様子にも通じておったからである。

広辞苑によれば業（ぎょう）とは〔暮らしのための仕事<sup>なりわい</sup>。生業。つとめ。いとなみ〕であり、行（ぎょう）は〔修行。おこない〕とあります。上記文章を考えると

「すべて業<sup>ぎやう</sup>は行<sup>ぎやう</sup>である」とは日常の生活そのものが修行であるということでしょう。

顕幽一致<sup>けんゆういっち</sup>と身魂一本<sup>しんこんいっぽん</sup>は同じ考え方で、顕は顕界即ち我々が住む世界で幽は幽界即ち死後の世界や神霊世界を指します。そして合わせ鏡のように事象が一致するということです。また、身魂の身は肉体、魂は霊魂で、物質と精神は一本即ち同質であるということ、これは真理です。一般社会において事業（仕事）に精を出し、そのうえで信仰に励み神の経綸<sup>けいりん</sup>に奉仕するのがこの社会に於ける第一番の修行です。

自分のなすべき仕事を離れ一ヶ月間も人里離れた山林などに籠もり滝に打たれるなどは神の目から見れば神界の怠け者かサボタージュをしているようなものです。謂わば一ヶ月間の社会の損害です。

神様の言う仕事とは現界においては天地自然が万物を造り上げ、育てるように社会の発展進歩の事業に従事し、

みずから進んで事をなし発展させることが最も大切な事で、大本人はこの神の教を自覚できるか、そうでないかは重要なことです。

## 用語の解説

### ① 『業は行である』

伊都能売神諭には

「明治二十五年からの筆先は充分に腹へ入れて見て貰はぬと、<http://reikaimonogatari.net/index.php?obc=is24 - a189#a189>大変な取違いを致すものが出来るぞよ。<http://reikaimonogatari.net/index.php?obc=is24 - a190#a190>この綾部へ出て来ねば神徳が貰えんやうに思ふて、<http://reikaimonogatari.net/index.php?obc=is24 - a191#a191>一家を挙げて移住したり、<http://reikaimonogatari.net/index.php?obc=is24 - a192#a192>今迄の結構な職業まで捨てたり、<http://reikaimonogatari.net/index.php?obc=is24 - a193#a193>学校を退学したりして迄大本へ出て来るやうな事は神慮に叶はぬぞよ。<http://reikaimonogatari.net/index.php?obc=is24 - a194#a194>大本の祝詞の中にも学びの術に戦の法に益々も開け添はりて玉垣の内津御国は細矛千足国心安国と云々と出てあらうがな。<http://reikaimonogatari.net/index.php?obc=is24 - a195#a195>学びの術を捨てまで信心いたせとは申さんぞよ。それとも事情止むを得ぬ事があれば仕方はなけれども、<http://reikaimonogatari.net/index.php?obc=is24 - a197#a197>悔しい残念を忍耐することの出来るやうな身魂でありたら到底神の御用どころか我身一つさえも修まらんぞよ。」

\*注：細矛千足国と心安国は共に日本の美称

（大正八年二月二一日）」

神の教を聞いて感動したからと言ってわざわざ綾部に出てこなくても神業に奉仕することは出来ると書かれています。日常生活をしっかり行って居ればそれが神の道に仕えることで、必要があればその時に引き寄せてご用に使うともあります。「業は行である」は日常の生業に勤しみ、大本の教に基づいた生活そのままが修行であり、現界での生活が靈界に入っても同じように続いて行くのです。現界に居る間に出来る限り正しい生活をし、神業に奉仕することが同時に修行となります。この正しい生活をする心の状態を維持することが如何に難しいかは信仰をしていけば常に実感するところでもあります。そして、どの様な生活が正しい生活なのかを知り実践することが大切なことです。

従って生業を捨て山林に籠もって怪しい行いに熱中するのは、神界から見ると怠け者であり、本来の修行をサボっているのと同じことでもあります。総て神界から見れば現実世界の進歩発展に尽くすことを最も大切に考え、心がけなければならないのです。

神諭には常に「拔身の中にいる」ような気持ちで生活せよと書かれています。拔身とは裸の刀ですから、少しでも油断すると傷ついてしまいます。大本の信仰とはかくも厳しいものです。

この厳しさを切り抜けて行くには、生まれ赤子の気持ちになって過ごさねば出来ません。自己の利欲（執着＝これは靈界物語の大きなテーマの一つである）が少しでもあつては抜き身の中での生活は出来ないのです。

生まれたばかりの赤ん坊には何の慾もありません。ただ、生命維持のためにお腹がすいたら泣き、うんちやおしっこをしたからおむつを替えて欲しいと泣くばかりです。人は神の懷に抱かれ本来何も心配する必要がないと示されています。空飛ぶ鳥でさえ明日の餌を心配する必要がありません。ましてや万物の靈長（神の子）である人間がどうして明日の糧を心配する必要があるでしょうか。あるとすれば満足することを忘れ必要以上に求めるからです。自分の私腹を肥やすために人の物まで奪い取るからです。必要な物は必ず神様が与えてくれます。皆さんの生活を振り返ってみればよくわかることで大本の信仰をしていけばその事は良く実感できると思います。もし実感できないとするならば、必要以上の執着をもつからです。信仰をしていながら生活に不安を感じない人が居ます。もし不安を感じないなら信仰をやめるか、神に祈ることです。神に一切身を任せ、それも自分のことでは

くミロクの世の実現が一日も早くなり皆が心穏やかな生活が出来るように祈って下さい。

物語には弱肉強食、優勝劣敗と云う言葉がしばしば出てきます。神はあまねく平等に分け与えられることを望まれます。一分の人、強い者だけに富が集まることを決して喜ばれません。生まれ赤子のように何も望まず、何にも執着せず一切を親（神）に任せれば心豊かな生活が出来るはずで、現代生活ではそんな生活は無理だと考えるかも知れません。しかし、みろくの世とはこの様な生活です。一步でも、一日でも早く自分をそれに近づきたいものです。そうでなければ自分自身の中に弥勒の世を実現することは永遠に望めませんし、ましてや死後の天国も望めません。それは日常生活そのままが霊界に行っても続くからです。

現界での生活が霊界に入っても同じように続いて行くと書きましたが、「はて」と疑問に感じられた方も多いのではないでしょうか。顕幽一致、身魂一本とは簡単に言ってしまえば霊界と現界とが同質であると言うことです。人は心肺が停止して死ぬと、直ちに霊界に入りますが、霊界物語によると死んだことに気づかないと書かれています。突然今までと違った景色に戸惑うでしょうが死んだという意識はないのです。魂は生き通しですから肉体を離れ生から死に移ったと言っても現界から幽界に移っただけで魂の状態（心・気持ち）は何ら変わるわけではありません。それは魂には死というものが無いからです。

多く人は五十日経つとそのまま中有界に残るか、天国なり地獄に行きますが、天国や中有界での生活は現界での生活と大差ないようです。大差ないといってもそれは外見（日常生活の形態）のことだけであり靈魂の本質は天国といっても第三天国、中間天国、最奥天国ではそれぞれ雲泥の差があります。人は生前の魂（心）の状態が死後もそのまま続くと言うことは天国に行くのか地獄に墮ちるのかは生前の魂（心）の状態如何によることとなります。現世（現界）に居るときは肉体という隠れ蓑によって魂（心）の状態が隠されています（外分）。しかし死によってその隠れ蓑が取り外されると、魂の本来の姿が100%むき出しになります（内分）。従って霊界ではむき出しになった魂の状態と和合する場所（居心地のよい場所）、即ち天国なり地獄なりに必然的に行くこととなります。仮に地獄に行くべき魂が天国を望んだとしてもその魂の状態とは違う世界には、わずかな時間も居ることが出来ません。悪臭や汚穢をこよなく愛する魂が、天国の花園には一分も居られないからです。この逆もまた真で、あえてそこに止まれば、再び天国に戻ることは困難です。

《日常の生活そのものが修行であり、それを真剣に過ごさないと、死後天国には行けないのです。》

\*水鏡より仕事に関する文章を抜粋

047 「何の仕事にも霊をこめる」に

「どんな仕事にも霊を籠めてやらねばよい結果を得らるるもので無い。田圃でも花園でも主人が毎日見廻つて霊を籠めねば決してよく出来るものでない、小作人や下男にのみになげかけておいて、よく出来る筈がない、天恩郷の植物は、松でも、萩でも、アカシヤでも何でも皆非常な勢で成長する、それは私が毎日見廻つて霊を籠めて育てるからである」とある。

088 「人生の諸問題」より

「人は水の流れるやうに生活すればよろしい、水は流れ易い方向を撰んで、いと自然に自が途を開いて進み行く。途中障害物に突あたる事があると、又いと自然に方向転換をやつて進み易い道を進んで行く、これが処世法の秘訣である。自然に逆らつて低きにつかんとする水を高所に上げやうとする様な生活は、労多くして功が些ないものである。

現今の地上は、悪魔の集会所である。故に諸善神は天にのぼり、地に潜んで、其跋扈跳梁に任してあるが如き状態である。で有から善い事は容易に出来ない世の中である。善い人、善い仕事には却つて悪魔がつき纏ふて邪魔をする。恰度よい果実に悪い虫がつくやうなものであつて、神様のお守りを受けるより外に之を防ぐ道がないものである。甘い果実に悪い虫がつく、其虫がつかぬやうに人間が除虫法を行ひ、袋をかぶせて保護してやる。さうすると誠に立派な見事なものが得らるる道理。どんな性のよい人、又成功すべき仕事であつても、神様のお

守りがないと悪魔に祟られて、惜い事には十分成熟せずに、ポタリ、ポタリと途中で落ちて行く果実の其と同じ結果に終って仕舞ふのである。」《これは仕事のやり方であり、人生の生き方である。》

「どんな仕事でも十年位辛棒すれば運が向て来る。一年や二年では成功するものではない。一つ仕事をつかまへたらそれを変へぬほうがよい。二三年してはほかし、三四年しては職業を変へるやうな人は、生涯成功を見る事が出来ない、十年しても芽が出ねば、外の仕事を選んで見てもよいが、それも若い中の事で、四十歳を越したらもう、ちやんと一定の職業と云ふものが定まらねばならぬ。四十才で仕事が定まればそれがまあ普通である。四十歳を越して仕事をかへてもあかん、三十歳までに仕事が定まればその人は成功者となる事が出来る。」

113 「断の一字」より

「断じて行へば鬼神もこれを避く」と云ふ諺がある。物事は断の一字にある、断乎として行へば出来ないと云ふ事は無いのである。私は、どんな大問題にぶつつかつても一分間を出でずしてきめて仕舞ふのである。そしてそれを断行する。私が今迄なし来つた仕事は皆それである。世の多くの人は、この断の一字が欠けて居るから、仕事が出来ないのであると私は思ふのである。」

118 「神様のお仕事は二つ玉」より

神様のお仕事は二つ玉である。一つの仕事をせられると、同時に他にもそれと異なる大きな仕事が出来て居る。

119 「大事業」より

私には大事業と云ふものは無い、どんな大きな仕事でも、私は唯の仕事と思つてやつて行くのだ。人はよく「私は近頃大事業を計画して居る」などと云ふが、やらん先から大事業だなどと云ふやうでは、到底成功するものではない、初めから仕事に呑まれて居る。仕事はのんでかからねばならぬ。他から見て大事業だなどと思ふやうな事でも、「エ一寸小さな仕事を初めて居ます」と云ふ位な意気でやれば、どんな大事業だつて出来るものである。

120 「やり通せばよい」

大きな器には大きな蔭がさす。大きな仕事を初めれば、それに伴ふて種々の失敗も起り、批難攻撃もあるものである。悪い方は消して、よい方面ばかり見て、勇敢に進んで行けばよい。弱くてはいけない、強くなれ。強くなつて、物事をやり通せばよいのである。

170 「仏と神」

あの人は仏様のやうな人だと云ふ人は、お人よしの所謂好人物の代表とはなるが、仕事は出来ぬ。鬼神<sup>きしんきうれつ</sup>に泣くと云ふ諺がある、勇氣凛々、活気に満てるが神様だ、神様でなければ働きは出来ぬ。

② 『顕幽一致、身魂一本の真理』

大本教旨に「人は天地経綸の主宰なり、神人合一してここに無限の権力を發揮す」とあります。宇宙は陰陽（顕幽）二元で成り立っています。神又は人のみにてはこの世は成り立ってゆきません。言い換えれば幽界のみでは成り立たず、現界のみでも成り立ちません。幽の幽に坐す主神のご意志は幽の顕、顕の幽を経て最終的には顕の顕において実行されなければ完結しません。神の最終目的であるミロクの世は顕の顕、即ち現界において完結されるためには、我々人間が神の意志を代行する必要があります。だからこそ人は神の子神の宮になり得るのです。

顕は我々の住む世界です。幽は神々の住む世界や死後我々が行く世界です。上記で書いたように主神の意志の現われである幽界の事象は顕界でも同じでなければ最終段階での完結には成りません。顕幽一致は真理です。また身魂一本は顕幽一致を言い換えたものです。身は体で肉体です。魂は霊で精神(心)です。一本は同質とか同類という意味です。心で考え、感じた事を身体が行動に移すのです。

③ 『可急的』

国語辞書には可急と言う言葉は出てきません。おそらく、可急的は可及的の誤りではないでしょうか。（可及的の意味=できるだけ。なるべく）



④ 『生成化育、進取発展の事業』

「生成化育」は天地自然が万物を造り上げ、育てることです。「進取発展」はみずから進んで事をなし発展の事業を行うことです。生成化育は神の事業でありそれを助ける事業です。また、進取発展は人の事業でしょうか。大祓祝詞解（第39巻）に『【天津罪】とは、『天然自然に賦与せられたる水力、火力、電磁力、地物《地上に存在する天然または人工のすべての物体。樹木・河川・家屋・道路・鉄道などをいう》、砒物、山物、動植物等の【利用開発を怠る罪】をいふ。前にも言へる如く、所謂積んで置く罪、包んで置く罪也。宝の持腐れをやる罪也。』とあります。業は生業であるが、我々ほどの様な職業に就けばよいのであろうか、そこには自ずと社会の進歩発展に貢献できる職業が一番ふさわしいのではないのでしょうか。

⑤ 『惟 神』

基本宣伝歌 用語解説⑨参照 仏教の南無阿弥陀仏と相通じるもので、聖師は常に唱えなさいと示されています。

昔こんな話を聞いたことがあります。ある老婆が口癖のように「なんまいだ、なんまいだ」と云っていました。死んで閻魔の庁へ行ったら、閻魔様からお前は地獄行きだと宣告されます。そこで老婆は、私は坊様から「なんまいだ」を少しでも多く唱えれば極楽にやってもらえると聞き、暇あるごとに言ってきました。それなのに何故極楽に行けないのでしょうかと不服を言いました。そこで閻魔様はそれならお前が言っていた「なんまいだ」がここにあるから、お前はどれだけ真剣に言っていたかを調べてみようと言って、山のように積まれた「なんまいだ」を篩ふるいで振ったところ、わずかに手の平に乗るほどの「なんまいだ」しか残らなかったと言うことです。此が即ち黄泉醜人になるのでしょうか。

如何に心を込め真剣に『惟神たまちはえませ』と唱えるか。「成すべき事をなした後、一切を神に委ね、人事を尽して天命を待つ」気持ちこそ惟神の意味があるのでしょうか。

また、事をなすに先立ち主神に祈り、神からの内流をいただき正しい方向を感じさせていただく事が大切であると同時に、自分の努力無しに神に身を任せます、ではいけない。

⑥ 『壇特山』

北インド（現在のアフガニスタン）はガンダーラに位置するとされ、弾太落迦（だんだらか）とも称する。かつて釈迦の前身である須大拏太子（しゅたぬたいし）が菩薩行を修めたという。また、釈迦も師事したアーラーラ・カーラーマが住んでいたという。

日本では古くから悉達太子が苦行を積んだ地とされ、『うつほ物語』『梁塵秘抄りょうじんひしやう』『平家物語』などにも、暗喩あんゆ《ある物を別の物にたとえる語法一般》のニュアンスも込めて登場する

⑦ 『三世を達観する』

三世は過去・現在・未来を指します。また、顕幽神の三界をも指すのではないのでしょうか。即ち顕は我々が住む現実世界、別名現界。幽は死後行く中有界や地獄、大本では根の国底の国（根底の国）と云い幽界。神は神霊の世界で神界。これらを三千世界とも言います。

達観は〔一部に拘らないで全体を観察し、真理・道理をみきわめること〕

聖師は過去現在未来を即座に知り得、顕幽神の三界を救う救世主でもあります。

### 第三章 《 現界の苦行 》

#### 現代語訳

17 高熊山の修行は一時間神界（神霊世界）の修行を命ぜられると、現界（現実世界）では二時間の比例で修行をさせられた。しかし二時間の現界の修行より、一時間の神界の修行の方が数十倍も苦しかった。現界の修行とっては冬の空に肌着一枚となって、前後一週間水一杯も飲まず、食べ物も一切取らず、岩の上に静座して無言で居たことである。その間には降雨もあり、寒風も吹き、夜中になっても狐狸の声も聞かず、虫の音も無く、ときどき山が崩れるかと思うような怪音や、なんとも言へぬ厭らしい身の毛が震え上がる怪声が耳を打つ。寂しいとも、恐ろしいとも、なんとも言い表せない光景であった。……たとへ狐でも、狸でも、虎や狼でもかまわない、命ある動物がでてきて生きた声を聞かして欲しい。その姿だけでも、生物であつたら、一目見たいものだと、憧憬れるやうになった。ア、生物ぐらい人の力になるものはない……とっていると、かたわらの小籐の中からガサガサと足音をさせて、黒い影の動物が、私の静座する、三〇センチほど前までやってきた。夜眼には、確にそれと分りかねるが、非常に大きな熊のようであった。

18 この山の主は巨大な熊であるということを、常に年寄りから聞かされていた。そして夜中に人を見つけたが最後、その巨熊が八裂きにして、松の枝に懸けてゆくということを聞いていた。私は今夜こそこの巨熊に引裂かれて死ぬのかも知れないと、その瞬間に心臓の血を躍らせた。

ままよ何事も<sup>かむなから</sup>①惟神に任すしか方法はない……と、心を<sup>さいか たんでん</sup>①臍下丹田に落着けた。サアさうなると恐ろしいと思った巨熊の姿が大きな力を与えてくれ、その呻声が恋しく懐しくなった。世界一切の生物に、仁慈の神の<sup>いく</sup>②生魂が宿っていると言うことが、適切に感じられたのである。

こうした猛獣でさえも寂しいときには力になるのに、言うまでもなく万物の霊長である人においてはなおさらである。ア、世界の人々を悪んだり、怒らしたり、侮ったり、苦しめたり、人を何とも思わず、日々を暮してきた私は、何とした勿体ない罰当りであったのか、たとへ敵や悪人だと言っても、皆神様の霊が宿っている。人は神である。いや人ばかりではない、19 一切の動物も植物も、皆われわれのためには、必要な力であり、頼みの杖であり、神の一部である。

人はどうしても一人では一人前の人間として世間に出ることはできない。<sup>し おん</sup>③四恩といふことを忘れては人としての道が成り立たない。人は持ちつ持たれつ相互に助け合つてゆくべきものである。人と名がつけば、たとへ其の心は鬼でも蛇でもかまわない。大切にしないでわならない。それに人はすこしの感情や、利害の関係から、たがいに憎み嫉み争うことは、何たる矛盾であらう、不真面目であらう。人間は神様である。<sup>た</sup>④人間以外に力になってくれる神様がどこにあるだろうか。

神界には神様が第一の力であり、頼りであるが、現界では人間こそ、<sup>われら</sup>吾等を助ける誠の生きた尊い神様であると、こう心の底から考えてくると、人間が尊く有難くなって、粗末に取扱うことは、天地の神様にたいして、恐れありということ強く悟ったのである。

これが私自身の宇宙一切のものに対する、慈しみあわれむ心のめばえであつて、有難く大神業に奉仕する基礎的実習であつた。ア、<sup>かむなから たまちはえませ</sup>惟神霊幸倍坐世。

我々はよく経験するが、労働などでの肉体的苦痛は耐えられるが精神的苦痛は何倍も苦しいように聖師も神界での修行は数十倍も苦しかったようだ

とはいえ、現界での修行も苦痛だけでなく悟りを得るのである。生き物の姿はなく怪音のみの世界で突然大熊に出会えば死を覚悟する。しかし、「ままよ何事も惟神に一任するに如かず」で、人は決心をすると怖い物がなくなる。惟神は神に一切を任す心を現わし、絶対の神に一切を任せば怖い物は無くなる。気持ちを臍の下にある丹

田に落着けると力が湧いてく。「サアさうなると恐ろしいと思っていた巨熊さえも大変な力となる。その呻声が恋しく懐しくなつた」。大小、形に関係なく生物に遭えば、「仁慈の神の生魂が宿りたまふといふことが、適切に感じられたのである。」とある。生魂は仁慈の神が全ての生物に与えたもうた根元の霊です。

「かかる猛獣でさへも寂しいときには力になるものを、いわんや万物の霊長たる人においてをやだ。ア、世界の人々を悪んだり、怒らしたり、侮つたり、苦しめたり、人を何とも思はず、日々を暮してきた自分は、何とした勿体ない罰当りであつたのか、たとへ仇敵悪人といへども、皆神様の霊が宿つてゐる。人は神である。吾人ばかりではない、一切の動物も植物も、皆われわれのためには、必要な力であり、頼みの杖であり、神の断片である」とは正にその通りです。人は草花や小さな動物を見ると心が和みます。それは、全ての動植物には生魂が宿っているのです、神の断片（一部）なのです。

しかし、今は人もペットも受難の時代です。嫁と姑がいがみ合うことを正当化して共に暮らすことを嫌い、嫁は子育てを他人に頼り、親は寂しさをペットに頼り、近所付き合いは希薄になり、親から子へ伝えられるべき伝承が途絶えてしまっています。本来人が人を癒し助けてこそ霊長たる人のはずが、ペットに頼り、ペットは本来の目的である役目を果たさず、犬が家の中で飼われ、人の家で暮らすべきでない小動物が家の中を我が物顔に闊歩しています。今は何でもありの時代です。しかし、神様は順序や秩序を重んじられます。物はあるべき所にあることが大切で冬の花火や、団扇は嫌われます。

「神界では神様が第一の力であり頼りであるが、現界では人間こそ、吾々を助ける誠の生きたる尊い神様であると、こう心の底から考えてくると、人間が尊く有難くなって、粗末に取扱うことは、天地の神様にたいし、恐れありといふことを強く悟りましたのである。

これが自分の万有に対する、慈悲心の発芽であつて、有難き大神業に奉仕するの基礎的実習であつた。ア、  
㊦惟神霊幸倍坐世。」

## 用語の解説

### ① 『臍下丹田』

一般には「せいかたんでん」と読むが、臍（へそ）の下の丹田（下腹部）と称する部位を指し、心身の活力の源である気の集まるどころです。

### ② 『生魂』

修行中に恐怖や寂しさを経験した聖師は神に一切を任せたとき、自分を八つ裂きにするかもしれない大熊と言えども神の生きた魂が宿っている事を悟られたのです。

#### 参 考

生魂（いくむすび）と読むときは動物の本質を現します。

茲に完全なる水素を産出した。水素は漸次集合して現今の呑むごとき清水となりぬ。この清水には高皇産霊神の火霊を宿し、よく流動する力が備はりぬ。水を動かすものは火にして、火を動かすものは水なることは第四巻に述べたるがごとし。この水の流体を、神典にては<sup>あしかびひにじのかみ</sup>葦茅彦遲神といふ。一切動物の根元をなし、之に霊系即ち火の霊を宿して一種の力徳を発生し、動物の本質となる。<sup>じんぎかん</sup>神祇官所祭の<sup>いくむすび</sup>生魂これなり。次に火水抱合して一種の固形物体発生し、宇宙一切を修理固成するの根元力となる。之を<sup>とこたちのかみ</sup>常立神といひ、剛体素といふ。神祇官所祭の<sup>たまつめむすび</sup>玉留魂これなり。金、銀、銅、鉄、燐、砂、石等はこの玉留魂を最も多量に包含し、万有一切の骨となり居るなり。この剛体素、玉留魂の完成するまでに太初より殆ど五十億年を費しみるなり。茲に<sup>くらげ</sup>海月なす漂へる宇宙は漸く固体を備ふるに至りぬ。・・・・

ここに流剛すなはち生魂と<sup>たまつめむすび</sup>玉留魂との水火合して不完全なる呼吸を営み、其中より植物の本質たる<sup>じゅうたい</sup>柔体<sup>たるむすび</sup>足魂を完成したり。之を神典にては<sup>とよぐもぬのみこと</sup>豊雲淳命といふなり。いよいよ宇宙は霊、力、体の元子なる、剛柔流の本

質完成されたのである。されど宇宙は未だその活動を開始するに至らなかつた。 【6/1 宇宙太元】

神祇官所祭	流体・生魂 <sup>いくむすび</sup>	=動物の本質	葦茅彦遲神
	剛体・玉留魂	=鉱物の本質	常立神
	柔体・足魂 <sup>たるむすび</sup>	=植物の本質	豊雲淳命

③ 『四恩』

「四恩といふことを忘れては人の道が立たぬ」とある。四恩は仏教用語。すべての人間がこの世で受ける四種の恩。ここでは天地の恩・社会の恩・父母の恩・衆生の恩などを意味する（広辞苑）。天地の恩は神や天然自然であり、衆生は生きとし生けるもの、一切の人類や動植物をさす。但し、四恩には違った説もある。

人はこの四つのも、すなわち自分を除いた総てのものと多かれ少なかれ関わりを持って生きている、まして人間は人間同士の関係を離れては生き難い。

④ 『人間をおいて力になってくれる神様がどこにあるだろうか』

人に対する深い思いや愛情が感じられる。人は一人で生きていけるだろうか？ 多くの人は孤独を感じて人恋し、神恋しとなるであろう。オギャと生まれて人の中に育った者は人を助け、助けられて生きてきたので人無しでは生きていけない。仮に犬や猫と居ても人恋しさは解消されない。本当の喜びや悲しみは人との関わりでしか生まれぬ。煩わしさもまた人生でありそこに人としての向上が生まれるのせず。この世に生まれ来た目的はこの世を地上天国にするという使命があるのです。現世にあっても、また靈界へ入っても喜びを与えてくれるのは人の魂です。しかし、その奥には大きな神の懷に抱かれている言う安心感が本です。

靈の礎(10) 【24 卷】には隠遁生活者が天国に入ってもやはり隠遁生活をする書かれている。何と孤独で淋しい事か。

## 第四章 《 現実的苦行 》

### 現代語訳

21 つぎに私の最も有難く感じたのは水である。一週間というものは、水一滴口に入れることもできず、咽喉はしだいに渴きだし、何とも言へない苦痛であった。たとへ泥水でもいい、水気のあるものが欲しい。木の葉でも噛んでみたら、少くらい水を含んでいるだろうが、それも一週間は神界から飲食一切を禁止されているので、手近にある木の葉一枚さへも、口に入れるわけにはゆかない。その上時間とともに空腹を感じ、気力は次第に衰へてくる。しかし神の御許しがないので、わずかなお土さえも口に入れることができない。膝は凸凹した岩の上に静坐しているので、是くらい痛くて苦しいことはない。寒風は肌身を切るやうであった。

私がふと空をあおぐ途端に、松の露がポトポトと雨後の風に揺られて、自分の唇の辺りに落ちて来た。何気なくこれを嘗めた。わずか一滴の松葉から落ちた露のその味は、甘露（とてもおいしい水）とも何ともたとへられぬ美味さであった。

22 この事から考へてみても、結構な水を火にかけて湯に沸し、温い熱いのと、小言を言っているくらい勿体ないことはない。

草木の葉一枚でも、神様の御許しが無ければ、戴くことはできず、衣服はどれだけ持っていたとしても、神様の御許しが無い以上は着ることもできず、ちょうど①餓鬼道の修業であった。そのお蔭で水の恩を知り、衣食住の大恩を覚り、贅沢などは夢にも思わず、どんな苦難に逢っても驚かず、悲しまず、どんな反対や、ひどい罵りや嘲りも、ただ勿体ない、有難い有難いと、平気で、社会に泰然自若（ゆったりと落ち着いて平常と変らない）、感謝のみの生活を楽しむことができるやうになったのも、全く修行のお陰である。

それについても一つ衣食住よりも、人間にとって尊く、有難いものは空気である。飲食物は十日や二十日くらい食べなくとも、死ぬやうな事はめったにないが、空気はただの二三分間でも呼吸しなかったなら、ただちに死んでしまうより途はない。私がこの修行中も空気を呼吸することだけは許されたのは、神様の無限の恵みであると思った。

23 人は衣食住の大恩を知ると同時に、空気の御恩を感謝しなくてはならない。しかし以上述べたことは、私が高熊山における修行の中で、この世すなはち肉体上に起った神示（神からの教え）の修行である。霊界における神示の修行は、到底前述のような軽く容易なものではなかった。何十倍も何百倍ともいえぬ大きな苦難の修練であった。

「ただ一滴の松葉の露のその味は、甘露とも何ともたとへられぬ美味さであった。」とあり水とは何とも有難い物です。

古事記には地球のことを大海原と表現しています。表面の七割が海で三割が陸地であることを古代の人は知っていたのです。地球上の97%が海水で淡水は3%で、しかも人間が利用できる水は全体の1%未満で、人の60～70%は水で構成されているそうです。

物語の中に五風十雨と言う言葉が出てきます。風は五日毎に吹き、雨は十日毎に降るのが理想的な気象である事を示しています。実際水は蒸発して天に昇り、雨となって地上に戻るサイクルはほぼ十日間だそうです。先にも書いたが天地が剖判する以前は宇宙全体が泥海であったと示されています。

余談だが、宇宙科学では2011年、クエーサーAPM 08279+5255（太陽系外惑星）の降着円盤に、地球の水の140兆倍という膨大な量の水が発見された。宇宙誕生から16億年後の時代に存在する天体であり、このことは、既にこの時代に大量の水が存在していた事を示している。また、水が見つかった領域の降着円盤の温度は210K（-63℃）と低いが、これは銀河系の5倍も暖かい異常な高温である。この大量の水が、星間物質の温度を冷やす冷却材としての役割を果たしたという説もあるそうです。

「結構な水を火にかけて湯に沸し、<sup>ぬる</sup>温い<sup>もつたい</sup>の熱い<sup>もつたい</sup>のと、小言を言っているくらい<sup>もつたい</sup>勿体ない<sup>もつたい</sup>ことはない」は心せなければなりません。私は少年の頃お水を粗末にする人は救われぬと、また神様は鉄の太い棒を針にするほどのご苦労をされて水を作られたと、よく母に聞かされたものです。日本人にとって水はさほどに大切なものと感じませんが、外国に行けば生水はほとんど飲めないし、人口の急激な増加と社会の発展に伴い、多くの国で水不足が発生しています。水の不足は、生活用水の不足だけではなく、深刻な食料不足や生態系への影響をもたらしています。また、汚水処理施設の未整備による水の汚染、危険な氾濫地域への居住人口の増加による洪水被害の増大等、様々な問題が発生しており、今後の世界人口の増加によって、水不足をはじめとしたこれらの問題が一層深刻化することが懸念されます。

「草木の葉一枚でも、神様の御許しが無ければ、戴くことはできず、衣服は何ほど持つてをつても、神様の御許しなき以上は着ることもできず、あたかも餓鬼道の修業であった。そのお蔭によって水の恩を知り、衣食住の大恩を覚り、贅沢なぞは夢にも思はず、どんな苦難に逢ふも驚かず、悲しまず、いかなる反対や、熱罵嘲笑も、ただ勿体ない、有難い有難いで、平気で、社会に泰然自若、感謝のみの生活を楽しむことができるやうになつたのも、全く修行の御利益である。」

人は全ての行為が自分の意志で行われていると思込込入っていますが、はたしてそうでしょうか、本当は神のお許しが無ければ何も出来ないのです。今は納得がいかないかも知れませんが追々勉強していくうちに理解できるでしょう。

「人は衣食住の大恩を知ると同時に、空気の御恩を感謝せなくてはならない。」  
衣食住があつてこそ人は生きていけるのだが、ほとんどの人は空気のあり難さについて考えたことはないでしょう。「人間にとつて尊く、有難いものは空気」です。今の人は水に空気になれすぎてその恩を忘れがちです。そしてここには出てこないが、も一つ大切なのがお土（大地）と火です。我々が身を置く大地がなければ全てが無に帰すのです。大地をご守護下さるのは便所の神様としても知られる金勝要神様です。火もまた大切ですが、行き過ぎた火力文明を神様は戒めています（火具土神）。火、水、空気、土は現界に有つては必要欠くべからざる物なのです。

## 用語の解説

『餓鬼道』 【ウイキペディアより】

俗に、生前に贅沢をした者が餓鬼道に落ちるとされている。ただし仏教の立場から正確に言えば、生前において強欲で嫉妬深く、物惜しく、常に<sup>むさぼ</sup>貪りの心や行為をした人が死んで生まれ変わる世界とされる。しかし大乘仏教では、後々に死後に生まれ変わるだけではなく、今生においてそのような行状をする人の精神境涯をも指して言われるようになった。餓鬼は常に飢えと乾きに苦しみ、食物、また飲物でさえも手に取ると火に変わってしまうので、決して満たされることがないとされる。極端な飢餓状態の人間と同じように、痩せ細って腹部のみが丸く膨れ上がった姿で描かれることが多い。

「<sup>しょうぼうねんじょきょう</sup>正法念処経」巻16には、餓鬼の住処は二つある。

1. 人中の餓鬼。この餓鬼はその業因によって行くべき道の故に、これを餓鬼道（界）という。夜に起きて昼に寝るといった、人間と正反対の行動をとる。《昼夜逆転した現代社会はまさに餓鬼道である》
2. <sup>ごいらいた</sup>薛荔多（餓鬼）世界（Preta-loka）の餓鬼。<sup>えんぶだい</sup>閻浮提《洲》の下、500由旬《1由旬＝7マイル》にあり、長さ広さは36000由旬といわれる。しかして人間で最初に死んだとされる<sup>えんまおう</sup>閻魔王は、劫初《世の初》に冥土の道を開き、その世界を閻魔王界といい、餓鬼の本住所とし、あるいは餓鬼所住の世界の意で、薛荔多世界といい、閻魔をその主とする。余の餓鬼、悪道眷属として、その数は無量で悪業は甚だ多い。

第五章 《 霊 界 の 修 業 》 [五]

現代語訳

24 霊界には天界と、地獄界と、<sup>ちゆうう</sup>中有界との三つの大きな領域があつて、天界は正しい神々や正しい人々の靈魂の安住する国であり、地獄界は邪神の集まる国であり、罪悪者の<sup>と</sup>墮ちてゆく国である。そして天界は至善《この上もなく道徳にかない》、至美《極めて美しく》、至明《至って物事の筋道（理）のあきらかで疑いがなく》、至楽《心身が安らかでたのしい》の神々のお住まいになる処で、天の神界、地の神界に別れていて、天の神界にも地の神界にも、それぞれ三段階の区画が在り、上中下の三段階の魂が、それぞれに鎮まる《生活する》樂園である。地獄界も根の国、底の国にわかれ、それぞれ三段階に区画され、罪の軽重、大小によって、それぞれに墮ちてゆく、至悪《この上もなく不道徳で》、<sup>しゆう</sup>至醜《極めてみにくく》、至寒《至って寒々として》、至苦《非常に苦しく》

刑罰を受ける区域である。今私はここに霊界の御許しを得て、天界、地獄界などのあらましを示して見やう。

天 界 …	天の神界 三段	また [神 界] という
	地に神界 三段	
霊 界 …	中有界 …… 浄 罪 界	また [精霊界] という
地獄界 …	根 の 国 三段	また [幽 界] という
	底 の 国 三段	

25 霊界の大要は大体前記のとおりであるが、わたしは芙蓉仙人の導きで、霊界探険の道へ順を追って進むこととなった。勿論身体は高熊山に正座して、ただ靈魂だけが行ったのである。

行くこと数百千里、飛行機以上の大速力で、足も地につかず、ほとんど十分ばかり進行をつづけたと思うと、急に芙蓉仙人は立ち止まって私を振り返り、

『いよいよここからが霊界の関門である』

といつて、大変大きな河のほとりに立った。ちょっと見たところでは非常に深いように思われたが、渡って見るとあまり深くはない。不思議にも私の着ていた紺色の着物は、水に洗われたのかたちまち純白に変わった。別に衣服の端を水に浸したとも思わないのに、肩先まで全部が清らかな白になった。芙蓉仙人とともに、名前もわからないこの大河を向こう岸へ渡りきり、<sup>みなせ</sup>水瀬を眺めると不思議にも水の流れと思つたのは誤りで、大蛇が幾百万とも限りないほど集まって、それぞれに頭を上げ、炎のような舌を吐いているのには驚かされた。それから次々に<sup>わた</sup>渉ってくる多数の旅人らしいものが、誰も皆大河と思つたと見えて、自分が渡つ時のように、各自に裾を捲きあげている。そして不思議なことに、各自の衣服が<sup>いろい</sup>種々の色に変化することであつた。26 あるいは黒に、あるいは黄色に茶褐色に、その他雑多の色に突然変っていくのを、どこからともなく、五、六人の怖い顔をした男が一人々々姓名を呼びとめて、一人々々に切符のようなものをその衣服につけている。そして早く立ち去れと促す。旅人は各自に前方に向つて歩きはじめ、一里ほど進んだと思ふ所に、一つの役所のようなものが建っていた。その中から四、五の番卒（番兵）が現われ、その切符を<sup>は</sup>剥ぎとり、衣服の変色の模様によって、上衣を一枚脱ぎ取られる者もあり、或いは二枚にされる者もあり、丸裸にされる者もある。また一枚も脱がされずに、他の旅人から取つた<sup>きもの</sup>衣物を、或いは一枚あるいは二枚三枚、中には七八枚も<sup>ま</sup>被せられて苦しうにして出て行くものもある。一人々々に番卒が付き添い、各自決まった場所へ送られて行くのを見た。

瑞霊・聖師がこの地上に降誕されたのは火の洗礼（霊的洗礼）を施し、物質（水、体）主義に陥っているこの社

会を火（霊）をもって救うためでした。従ってこの霊界物語は霊界の様子を開示し、我々に霊的覚醒を促しているのです。これまでどの宗教は霊界の様子をほとんど語ってきませんでした。ミロクの世を迎えるにはどうしても霊界が存在し、理想社会を迎え、どうしたら天国に行けるかを知る必要があるのです。それと同時に天国とは対極にある地獄をも知らなければなりません。

これから述べられる霊界の様子は仏教によってある程度は知らされていますが、その多くは我々の全く知らない世界です。そして現世の生活と密接に関係していることがわかります。

霊界には天界、地獄界、<sup>ちゅうう</sup>中有界の三大境域があると示されています。

天界：正しき神々や正しき人々の靈魂の安住する国（樂園）である。

至善、至美、至明、至楽の神境。天の神界、地の神界の別あり、<sup>おのおの</sup>各上中下の三段の御魂が鎮まる地獄界：邪神の集まる国であり、罪悪者の<sup>お</sup>墮ちてゆく国である。

至悪、至醜、至寒、至苦の刑域《罰を受ける地区》である。根の国、底の国にわかれ、各自三段に区劃。罪の軽重、大小によって<sup>お</sup>墮ちてゆく先が決まる。

中有界：天界と地獄界の中間にあり、死後一定期間（50日）ここに居て天国または地獄に赴く。

私は少年の頃近くに年一回地獄絵図を展示する寺があり、友達と連れ立ち行ったことがある。地獄絵の無残さ凄まじさに足がすくみ、全てを見ず早々に逃げ帰った記憶がある。地獄絵とは反対に蓮の<sup>うすな</sup>萼（がく）の上に人が座っているだけの極楽の絵には何の感慨もなかった。地獄は表せても極楽の楽しさ、喜びは人の手では表現しきれないようです。

大きな河とは①三途の川である。物語では「さんず」と読まずに「しょうづ」と読みます。

死後も現世にあった心（魂）の状態を保ちながら、直ちに霊界にある三大境域の何れかに行く。そして極善魂、または極悪魂は中有界を経ず直ちに天国または地獄に赴く。三途の川を経て<sup>やちまた</sup>八衢（仏者の六道の辻）にゆく靈魂は中有界で五十日間修行をした後行き先が決まる。臨死体験等で花園の中などを通過するのは天国に行く靈魂であり、淋しく険しい山岳地帯に行くのは地獄に行く靈魂である。三途の川を渡った時の衣服の状態ですでにそれが判明している。役所のような所とは閻魔の庁です。

## 用語の解説

### <sup>しょうづ</sup>三途の川

◇仏教では【ウイキペディアより】

一説に、俗に三途川の名の由来は、初期には<sup>と</sup>「渡河方法に三種類あったため」であるともいわれる。これは善人は金銀七宝で作られた橋を渡り、軽い罪人は山水瀬と呼ばれる浅瀬を渡り、重い罪人は強深瀬あるいは江深淵と呼ばれる難所を渡る、とされていた。

しかしながら、平安時代の末期に、「橋を渡る（場合がある）」という考え方が消え、その後は全員が渡舟によって渡河するという考え方に變形する。渡船の料金は六文と定められており、仏教様式の葬儀の際には六文銭を持たせるといふ習俗が以来ずっと続いており、現在では「文」という貨幣単位がないことや火葬における副葬品制限が強まっていることから、紙に印刷した六文銭（→冥銭）が使われることが多いようである。

また、三途川には十王《閻魔》の配下に位置づけられる<sup>けんえ</sup>懸衣翁・<sup>だつい</sup>奪衣婆 という老夫婦の係員がおり、六文銭を持たない死者が来た場合に渡し賃のかわりに衣類を剥ぎ取るようになっていた。この二人の係員のうち奪衣婆は江戸時代末期に民衆信仰の対象としてブームとなった。

なお、「この世」と「あの世」を分ける川があるという考えはある程度には普遍的なもので、仏教概念として三途川思想が渡来する以前より、日本には「境界としての川」のイメージがあったという説もある。また、ギリシア神話でも、この世とあの世を分けるステュクス・アケロンという川が想定されており、そこにはカローンという渡し守がいることになっている。



◇霊界物語では

ここでは三途の川を渡ると着ていた衣服の色が変わると書かれている。聖師は紺色の衣服が白く替わったと有り白くなるほど善魂なのであろう。また、大河と思っていたのが実は大蛇の群れであったと有る。

第40巻 第11章「三途館」に以下のように示されている。

婆『何と云つても離さない。ここは幽界の関所だから、お前を赤裸にして、地獄へ追ひやらねばならぬのだ。此三途の川には神界へ行く途と、現界へ行く途と、幽界へ行く途と三筋あるから、それで三途の川といふのだよ。伊弉諾尊様が黄泉国からお帰りをなさった時御禊をなさったのも此川だよ。上つ瀬は瀬強し、下つ瀬は瀬弱し、中つ瀬に下り立ちて、水底に打ちかづきて御禊し給ひし時に生りませる神の名は大事忍男神といふことがある。それあの通り、川の瀬が三段になつてゐる。真中を渡る霊は神界へ行くなり、あの下の緩い瀬を渡る代物は幽界へ行くなり、上の烈しい瀬を渡る者は現界へ行くのだ。三途の川とも天の安河とも称へるのだから、お前の霊の善悪を検める関所だ。サアお前はどこを通る心算だ。真中の瀬はあゝ見えても余程深いぞ。グズグズしてると、沈没して了ふなり、下の瀬の緩い瀬を渡れば渡りよいが其代りに幽界へ行かねばならず、どちらへ行くかな。モ一度娑婆へ行きたくば上つ瀬を渡つたがよからうぞや』

レーブ『何程瀬が緩いと云つても幽界の地獄へ行くのは御免だ。折角ここまでやつて来て現界へ後戻りするのめ気が利かない。三五教に退却の二字はないのだから……併しカルは奴、マ一度現界へ帰りたくば婆アさまの言ふ通り、あの瀬をバサンバサンと渡つてみい。俺はどうしても神界行だ、虎穴に入らずんば虎児を得ずといふから、一つ運を天に任し、俺は神界旅行に決めた。時に途中で別れた連中はどこへ行つたのだらうか、婆アさま、お前知つてゐるだらうな』

婆『あいつかい、あいつは一途の川を渡つて、八方地獄へ真逆様に落ちよつたのだよ』

カル『一途の川とは今聞き始めた。どうしてマア彼奴等はそんな所へ連れて行かれよつたのだらう』

婆『一途の川といふのは、善一途を立てたものか、悪一途を立てた者の通る川だ。善一途の者はすぐに都率天まで上るなり、悪一途の奴は渡しを渡るが最後八方地獄に落ちる代物だ、本当に可哀相なものだよ。カルは部下となつてゐたあの八人は今頃はエライ制敗を受けてゐるだらう。それを思へば此婆アも可哀相でも気の毒でも何でもないわい。オホ、ハ、ハ』

カル『コリヤ鬼婆、俺の部下がそんな所へ行つてゐるのに、何だ気味がよささうに、其笑ひ態は…貴様こそよい悪垂婆だ。何故一途の川をこんな婆が渡らぬのだらうかな、のうレーブ』

婆『何れ幽界の関所を守るやうな婆に慈悲ぢやの情ぢやの同情などあつて堪るかい、悪人だから三途の川の渡守をしてゐるのだ。善人が来れば直に最前のやうな娘になり、現界の奴が来れば上皮下だけ綺麗な中面の汚い娘に化ける。悪人が来ればこんな恐ろしい婆になるのだ。約りここへ来る奴の心次第に化ける婆アだよ』

考察：『伊弉諾尊様が黄泉国からお帰りをなさった時御禊をなさったのも此川だよ』とある。天の安河原である死後直ちに三途の川にいたる。昔たらそこには鬼婆がいて銭を取って川を渡してくれるらしい。物語では女性が居て先ず応対してくれるが、魂の状態によってその姿が違ふ。天国に向かう魂には妙齡の美人となつて対応し、地獄へ行く魂には恐ろしい婆となり、もう一度現界へ戻る魂には一見綺麗に見えるがその実心穢い娘となる。渡る瀬も三段に分かれ、上つ瀬は流れが速く現界に戻る魂、中つ瀬は中程度の流れで神界（天国）に、下つ瀬は緩やかな流れで幽界（中有界及び地獄）に行く魂が渡る。そして、三途の川を渡ると八衢に赴くがその道は、中つ瀬を渡つた魂は春の野を行くような気分で着き、下つ瀬を渡つた魂は寂しく、陰しく、恐ろしい道を通つて八衢に着く。

三途の川 — 上つ瀬・・・ 烈しい流れ・・・ 現界へ行く途  
                  中つ瀬・・・ 中間の流れ・・・ 神界（天国）へ行く途

— 八衢へ

（天の安河） 下つ瀬・・・緩い流れ・・・幽界（中有界又は地獄）へ行く途

また、一途の川というのがある。極善者が極悪者通る川で、極善者は直ちに都率天（第一天国）に行き、極悪者は火の車が迎えに来て八万地獄に落ちる。

第14巻第8章「泥の川」では三途の川の鬼婆は以下のようにいっています

『此処へ来るのは、娑婆の罪を亡ぼした奴の来る所だ。貴様は罪悪の借金を沢山積んで居るから、モツトモツト苦しい目をしてから出て来るのだ。罪悪の借金を娑婆へ残して、コンナ処へ逃げて来るとは、余り狡いぢやないか、薄志弱行にも程があるワ、この三途の川はドンナ所だと思つて居るか、貴様の身魂を洗濯する所かい、天で言へば天の安河も同様な処ぢやぞ』 【14/8 泥の川】

考察： 三途の川は「娑婆の罪を亡ぼした奴の来る所だ」と罪のない綺麗な魂の来る所であり、「貴様の身魂を洗濯する所かい」そうじゃ無かろう。「天の安河も同様な処」と書かれており、天の安河は高天原でも最も清浄な場所である。三途の川の中つ瀬を渡って東の道を通って来る魂は天国に行く。

さらに以下のようにも言っている

娑婆『貴様は分らぬ訳だ、娑婆の奴は二重転売と吐かして、一遍売りよつて二度売つたり仕様もない六〇六号《梅毒の薬、サンバルサン》の御厄介にならねばならぬ様な腐れ女に、涎を垂らしながら揚句の果てには二次会とか三次会とか吐かして騒ぐぢやないか。それさへあるに一夫一婦の天則を破り、第一夫人第二夫人だの、第一妾宅だの第二第三、何々妾宅だのと洒落よつて、体主霊従のありつ丈けを尽して居る虫けらの如うな人間許りだらう。現界の事は直に幽界に写るのだ、一遍死んだ位ぢや死太い身魂が、仲々改心いたさぬから今一遍出直し、それでも改心せずば三遍四遍と何遍でも焼き滅すのだ。貴様は娑婆で廿世紀頃に始まった三五教《大本》の教を聞いてゐるだらう、改心をいたさねば何遍でも、身魂を焼いて遣るぞよと云ふことがあるだらう、今の娑婆の奴は一度死んだら、二度は死なないと、多寡をくくつて居やがるが、一度あつた事は、二度も三度もあるものだぞ、何遍でも死なねばならないぞ』 【14/8 泥の川】

幽界に行った魂はもう一度娑婆へ修行に出てくるが、そこで改心出来なければ何度でも修行させられるようだ。

第六章 《八衢の光景》 [六]

現代語訳

27 ここは黄泉《死後の世界》の①八衢といふ米の字形の辻である。その真中に一つの霊界の政務を取り扱う政庁（役所）があって、②牛頭馬頭の恐い番卒が、猛獣の毛皮を身につけたのもあり、丸裸に猛獣の皮の褌を締めこみ、突棒や、手槍や、鋸や、斧、鉄棒に、長い火箸などを持った奴が沢山に出てくる。私は③芙蓉仙人の案内で、ズツト奥へ通ると、その中の小頭とおぼしき鬼顔の男が、長剣を杖に突きながら出迎えた。そして芙蓉仙人に向って、『御遠方の所はるばる御苦勞でした。今日は何の御用で御来幽になりましたか』と恐い顔に似合はぬ丁寧な挨拶をしている。私は意外な思いをしながら、両者の応答を聞くだけであった。芙蓉仙人は答礼をしながら、

『大神の命令によって大切な修業者を案内して参りました。すなはち④この精霊であります、今回は現界、神界、幽界の三界に対する使命を帯び、第一に幽界の視察を兼ねて修業にきたのです。この精霊は丹波の高熊山に古くから秘めおかれまして、三つ葉躑躅の靈魂です。28 どうぞ大王にこの旨を御伝達をねがいます』と、言葉に力をこめての依頼であった。小頭は仙人に軽く一礼して急ぎ奥に行った。しばらくの間待っていると、奥では何事が起ったのかと思われるほどの物音が聞えてきた。芙蓉仙人に、

『あの物音は何でしょうか』  
と尋ねてみた。仙人はすぐに、

『修業者が来幽したので準備をしているのだ』

と答へられた。私は怪んで、

『修業者とは誰ですか』

とたずねた。仙人は答へて、

『お前のことだ。肉体ある精霊が⑤幽界に来るときは、いつも庁内の模様を一時変更される決まりである。今日は特に、神界より前もって知らせが無かったので、幽庁では、うろたえていると見える』

と言われた。29 しばらくして静かにさかいの戸を開けて、前の小頭を先頭に、数名の守卒（守備の番兵）らしいものと共に出できた、軽く二人に目礼し前後に付添って、奥へ奥へと導いてゆく。一番上の席には白髪で異様（他とは違った様子）の老神が、机を前において正座しておられた。何となく威厳がありしかも優しみがある。そしてたいそう美しい顔立ちであった。

芙蓉仙人は少し腰を屈めながら、その右前側に座って何事か申しあげる様子であった。判神は綺羅星のように中段の間に列んでゐた。老神は私を見て美しい慈しみの眼差しを持った笑顔を作りながら、

『修業者殿、遠いところをご苦勞です。はやくここに』

と老神の左前側に私を座らせた。老神と芙蓉仙人と私とは、三角形の陣をとった。私は席につき老神に向って頭を低くさげて敬意を表わした。老神もまた同じく敬意を表して頭を低くして挨拶され、

『私は地獄にある根の国底の国の監督を天神より命じられ、三千年余り当庁の主であり、大王です。今は天運循環し、いよいよ私の任務も一年余りで終わる。私はお前とともに霊界、30 現界において互いに提携し、それによって宇宙の大神業に参加しようと思う。しかし、わたしはすでに永年幽界を主宰したので今さら幽界を探究する必要はない。⑥お前は今はじめての来幽だから、現幽両界のため、実地について研究する必要がある。そうでなければ今後、⑦三界を救うほどの大きな慈悲ある神人になることは出来ない。是非々々根の国、底の国を探究して現界に帰りなさい。お前の生まれた土地を守る産土の神をお招きしよう』

といて、⑧天の石笛の音もさわやかに吹きになると、忽然として白衣の神が、雲に乗って降りてこれ、三者の前に現われ、丁寧な態度で、何事か小声に大王におっしゃられ、つぎに幽庁の列座の神に向かい厚く礼を述べ、つぎに芙蓉仙人に対して、氏子の御世話をして頂いたことを感謝され、最後に私にむかって一巻の書物を

くだされ、頭上から息を吹きこまれるや、私の腹部ことに臍下丹田（へその下）は、にわかには暖か味を感じ、身体と魂の全体に無限ではかりしれない力が与へられたやうに感じられた。

ここで「汝」の訳をお前とするか貴方とするか迷った。この時点では芙蓉仙人や大王は修行者である喜三郎（聖師の前身）より上の立場にいますが、先に行けば救世主であり立場は逆転します。ここでは現状を重んじました。

この章で書かれた状景は私が少年時代に見た地獄極楽図とよく似ていますが、現代の人々、特に若い人達にはなかなか受け入れがたい光景でしょう。

聖師はいよいよ靈界探検を始められるため閻魔王(国常立命)に会われます。救世主としての聖師(瑞の御魂)は先ず幽界を救う必要があるようです。

『今は天運循環し、いよいよ私の任務も一年余りで終わる。私はお前とともに靈界、現界において互いに提携し』とあります。この文章から靈界の改造は国常立尊のお役であり、現界の改造は素盞鳴命のお役ですから、聖師が素盞鳴尊（天の御三体の神様）であることが伺えます。天より降って国祖を補佐されるのでしょうか。そして、この高熊山（現界）での修行は三界を救う大神とまで成長されるのです。

現代の我々には産土神という観念は薄いのですが、その土地を守護する村長のようなものです。従って親族の生死に関しては産土神に報告する事が大切です。

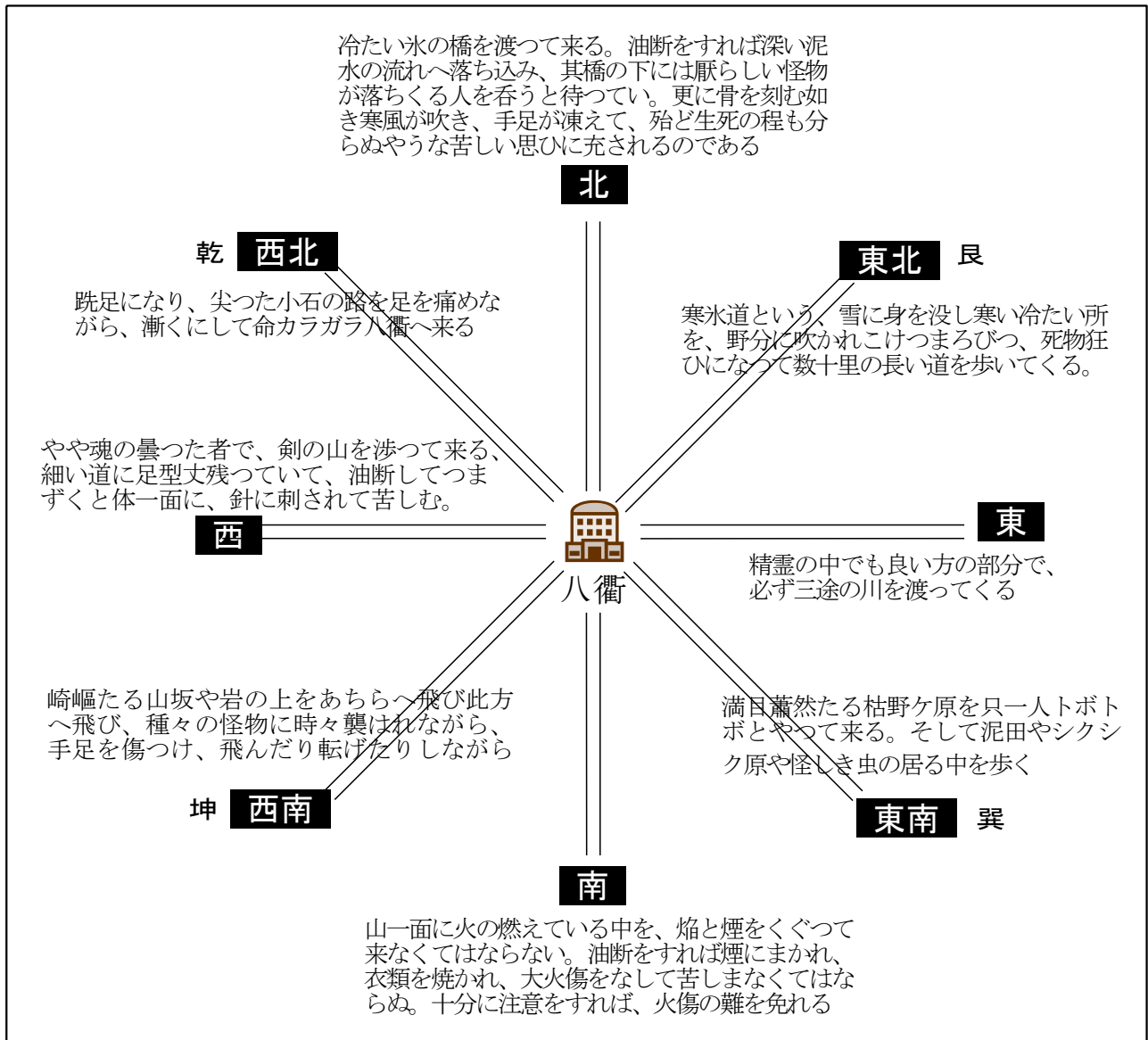
## 用語の解説

### ① 『八 衢』

第四八卷第七章 「六道の辻」に八衢のことが詳しく書かれています。

精靈界は善靈悪靈の集合する天界地獄の中間的境域にして、之を天の八衢といふ事は既に述べた所である。さて八衢は仏教者の云ふ六道の辻の様なるものである。又人の死後此八衢の中心なる関所に来るには、いろいろの道を通るものである。東西南北乾 坤 巽 艮と、各精靈は八方より此関所を中間として集まり来るものである。東から来る者は大抵は精靈の中でも良い方の部分であり、さうして三途の川が流れてゐる。どうしても此関所を通らなければならないのである。又西から来る者は稍魂の曇つたものが出て来る所であつて、針を立てたやうな、所謂劍の山を渉つて来る者である。ここを渉るのは僅に足を容るだけの細い道がまばらに足型丈残つて居つて、一寸油断をすればすぐに足を破り、躓いてこけでもしようものなら、体一面に、針に刺されて苦しむのである。又北から来る者は冷たい氷の橋を渡つて来る。少しく油断をすれば幾千丈とも知れぬ深い泥水の流れへ落ち込み、そして其橋の下には何とも云へぬ厭らしい怪物が、鱈の様な口をあけて、落ちくる人を呑まむと待つてゐる。そして其上骨を刻む如き寒い風が吹きまくり、手足が凍えて、殆ど生死の程も分らぬやうな苦しい思ひに充されるのである。又南の方から来る精靈は、山一面に火の燃えてゐる中を、焰と煙をくぐつて来なくてはならない。之も少しく油断をすれば煙にまかれ、衣類を焼かれ、大火傷をなして苦しまなくてはならぬ。併しながら十分に注意をすれば、火傷の難を免れて八衢の中心地へ来る事を得るのである。又東北方より来る者は寒氷道と云つて、雪は身を没するばかり寒い冷たい所を、野分に吹かれながら、こけつまるびつ、死物狂ひになつて数十里の長い道を渉り、漸くにして八衢の中心地へつくのである。又東南より来る精靈は、満目蕭然たる枯野ヶ原を只一人トボトボとやつて来る。そして泥田やシクシク原や怪しき虫の居る中を、辛うじて中心地へ向ふのである。又西南より来る精靈は、崎嶇たる山坂や岩の上をあらゆる飛び此方へ飛び、種々の怪物に時々襲はれながら、手足を傷つけ、飛んだり転げたりしながら、漸く八衢の中心地に出て来るものである。又西北より来る精靈は、赤跣足になり、尖つた小石の路を足を痛めながら、漸くにして命カラガラ八衢へ来るものである。併しながら斯の如き苦しみを経て各方面より之に集まり来る精靈は、何れも地獄へ行くべき暗黒なる副守護神の精靈ばかりである。而して各方面が違ひ苦痛の度が違ふのは、其精靈の悪と虚偽との度

合の如何に依るものである。又善霊即ち正守護神の精霊は、何れの方面より来るも、余り苦しからず、<sup>あだか</sup> 俗も春秋の野を心地よげに旅行する様なものである。これは生前に尽した愛善の徳と信真の徳によつて、精霊界を易々<sup>やすやす</sup>と跋涉<sup>ぱつせふ</sup>する事を得るのである。善の精霊が八衢へ指して行く時は、<sup>ほとん</sup> 殆ど風景よき現世界の原野を行く如く、或は美はしき川を渡り、海辺を伝ひ、若くは美はしき花咲く山を越え、或は大河を舟にて易々と渡り、又は風景よき谷道を登りなどして漸く八衢に着くものである。正守護神の通過する此八衢街道は、殆ど最下層天国の状態に相似してゐるのである。<sup>しか</sup> 而して八衢の関所は正守護神も副守護神も、<sup>すべ</sup> 凡てのものの会合する所であつて、此処にて善悪真偽を査べられ、且修練をさせられ、いよいよ悪の改善をする見込のなきものは、或一定の期間を経て地獄界に落ち、善霊は其徳の度に依じて、各段の天国へそれぞれ昇り得るものである。 【48/7 六道の辻】



この文章を読むと霊界は想念の世界である事がよく伺える。日頃の心の状態がそのまま現れるのである。肉体という隠れ蓑を脱ぐと、常から春のような心で居れば八衢へ行く道もまた春の気分であり、常に何かいびくびくしたり、寒風や氷のような心であれば霊界もそうした状態の世界を通らなければ八衢には着けない。

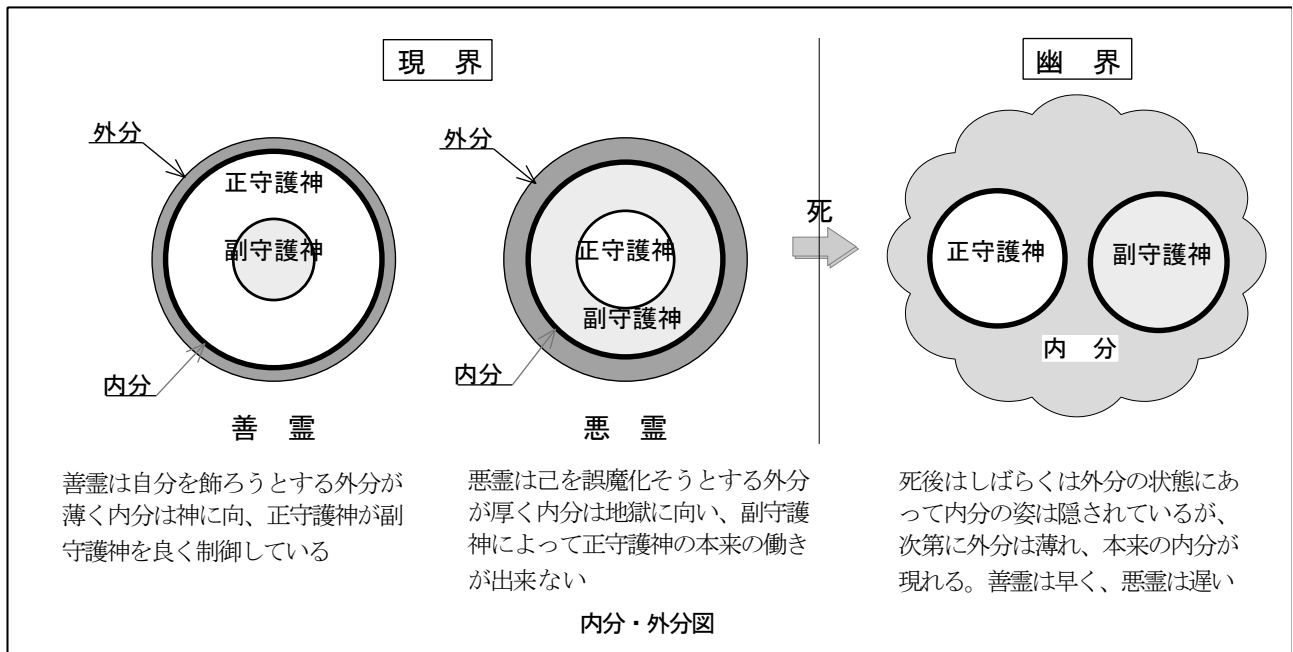
○天の八衢（中有界）に在る人霊は頗る多数である。八衢は一切のものの初めての会合所であつて、此処にて先づ靈魂を試験され準備さるるのである。人霊の八衢に彷徨し居住する期間は必ずしも一定しない、直に高天原へ上るのもあり、直に地獄に落ちるものもある。極善極真は直に高天原に上り、極邪極悪は直に根底の国へ墜落してしまふのである。或は八衢に数日又は数週日数年間居るものである。されど此処に三十年

以上居るものは無い。此の如く時限に於て相違があるのは、人間の内外分の間に相応があると、あらざるとに由るからである。

○人間の死後、高天原や根底の国へ行くに先だつて何人も経過すべき状態が三途ある。そして第一は外分の状態、第二は内分の状態、第三は準備の状態である。この状態を経過する境域は天の八衢（中有界）である。然るに此の順序を待たず直に高天原に上り、根底の国へ落つるものもあるのは前に述べた通りである。直に高天原に上り又は導かるものは、その人間が現界に在る時神を知り、神を信じ善道を履み行ひ、その靈魂は神に復活して高天原へ上る準備が早くも出来て居たからである。

また善を表に標榜して内心悪を包蔵するもの即ち、自己の凶悪を装ひ人を欺くために善を利用した偽善者や、不信仰にして神の存在を認めなかつたものは、直に地獄に墜落し無限の永苦を受くる事になるのである。

【16/ 霊の礎（一）】



外分とは生存中は心(魂)の醜悪さも肉体によって隠されている(人によっては外面如菩薩、内心如女夜叉的状态)。死後しばらくはこの状態です。しかし時間とともに外分の状態が薄れ内分が表に現れ、本当の心(魂)の状態が現れて来ます。そして天国または地獄へ行く準備状態に入る。これが中有界に於ける三途です。

死者は死後一旦中有界に行くが、極善者および偽善者、極悪人は中有界に留まることなく直ちに天国に登り、また地獄へ落ちて行く。極善、極悪に中有無しです。

第一三章「天使の来迎」の用語の解説④も参照されたい。

参考：六道

〔仏〕衆生が善悪の業によっておもむき住む六つの迷界。すなわち、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天。六観音・六地藏・六道銭・六道の辻はこれに由来する【広辞苑】

六道とは、仏教において迷いあるものが輪廻するという、六種類の迷いある世界のことで、天道（天上道、天界道とも）、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道をさす。

仏教では、輪廻を空間的事象、あるいは死後に趣く世界ではなく、心の状態として捉える。たとえば、天道界に趣けば、心の状態が天道のような状態にあり、地獄界に趣けば、心の状態が地獄のような状態である、と解釈される。なお一部には、天狗など、この輪廻の道から外れたものを俗に外道（魔縁）という場合もある（ただし、これは仏教全体の共通概念ではない）。【ウイキペディアより】

② <sup>こずめず</sup>牛頭馬頭

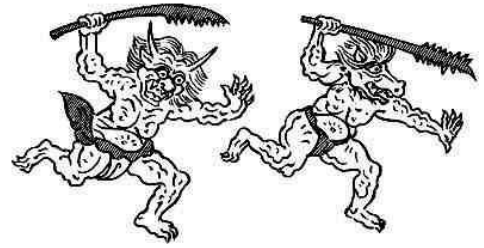
地獄の獄卒で、牛頭人身のものと馬頭人身のもの。

③ <sup>ふよう</sup>松岡芙蓉仙人

富士山の神霊、木花咲耶姫の天使です。

④ <sup>も</sup>この精霊

精霊は死後、肉体から解放された霊。死者の霊魂だが、ここでは修行者を指し、肉体は生存している。



⑤ 幽界

死者の赴く世界でとくに中有界及び地獄界を指す。

⑥ 『汝は今はじめでの来幽なれば、現幽両界のため、実地について研究さるるの要あり』

修行者（聖師）を迎えた白髪異様の老神は閻魔大王である。実はこの大王は御引退になった国祖国常立尊である。天神の命により三千有余年の間地獄を監督してきた閻魔大王の任務ももう1年余りになったと言っている。聖師の出現により宇宙の三界を救う最終段階に入ったのです。

「三界を救ふべき大慈の神人たることを得ざるべし」とあるのは聖師が救世主であることを示しています。この後の章では幽界探検で多くの魂が救われる状況が出てきます。

⑦ 三界

現、幽、神の三界。現は現界（我々の住む現実世界）。幽は幽界（中有界及び地獄界）。神は神界（又は天界）の三界を指し、著者・出口王仁三郎は三界の救世主としての使命を帯びて修行に来た。

⑧ <sup>あま いわなえ</sup>天の石笛（第13章 用語の解説 ③天然笛と鎮魂の玉 を参照）

神代の楽器。玉は古代から神が宿ると信じられ、天然の石に自然穴のあいたもの。天然笛ともいう。

千早振る神代のむかしの物語

あらたに悟るときは来にけり

世を救ふ神の稜威<sup>みいづ</sup>もたかくまの

露に潤ふ百の人々

寝ながらに幽世<sup>かくりよ</sup>の事宣べて行く

吾には夜の守りありけり